

2026. 3. 1

現代俳句千葉

160号

巻頭エッセイ

現代俳句とは

副会長 高橋 健文



現代俳句協会の昨年のテーマ「昭和百年／として、各地の評議員に向け、「私が推す『現代俳句』三人三句」のアンケートが昨年実施された。その時に私が選んだのは次の三句。

じゃんけんで負けて蛭に生まれたの 池田 澄子
あやまちはくりかへします秋の暮 三橋 敏雄
車にも仰臥という死春の月 高野ムツオ

結果集計を見てみると、何れの句も上位に入った句ばかり。特に一句目は第一位の得票だった。

かつて、現役教員だった時に「ゆとりの時間」というのがあって、その時に私が開いた講座は「句会」だった。その初回、生徒達に俳句に親しんでもらおうと、俳句を五十句選んでプリントし、各々にその中から好きな句を五句ずつ選んでもらった。その時の高校二年生三十

人の一番人気がこの「じゃんけんで」の句だった。そのこともあって、私にとっても思い入れの深い句になった。口語調で詠まれ、親しみやすく、生き物の生命誕生の偶然性に触れた内容が高校生にとっても受け容れやすいものを感じられたのだろう。

二句目の作者は、池田澄子の師である三橋敏雄。広島府の平和記念公園の原爆死没者慰霊碑の碑文「安らかに眠って下さい過ちは繰返しませぬから」の一部を逆手にとったもの。平和を希求する思いが強く出ている。この句の場合、季語「秋の暮」は動きそうだが、このあつさりとした付け方が、逆に上五・中七を際立たせていると言える。

三句目は、東日本大震災発生直後の句。その被害の甚大さを仰向けにひっくり返された車の姿を描いて表したもの。その車を、「春の月」が悼むように優しく照らしている。

戦争や災害を含めた、その時代における様々な事象に触れ、また、命あるものの生死に思いを至らせた作品を、「現代俳句」と言えるのではないか、と思う。

目次

現代俳句とは	高橋健文	1
秋の吟行会		
晩秋の我孫子手賀沼界限		2～3
会員・会友の近況		3・9
諸家近詠		4～5
私の感銘句		6～7
研究句会報告		8
(津田沼・青葉・柏・君津・いすみ安房)		
強化部だより		9
ひろば・掲示板		10

千葉県現代俳句協会会報

秋の吟行会

晩秋の我孫子手賀沼界隈

会場 我孫子市南近隣センター けやきプラザ

令和七年十二月二日(火)

十二月二日(火) 十時、我孫子駅出口に散々集合し、晩秋から初冬の手賀沼周辺の吟行のスタートです。

天気は快晴、沼周辺の銀杏はほぼ散りかけてはいましたが空気が爽やかに澄み切っていました。細長く広がる手賀沼の中央に架かる手賀大橋のすぐ先には親水広場(水の館)と山階鳥類研究所が楽しめます。また手賀沼公園から我孫子駅にかけては、坂を登りながら白樺文学館・志賀直哉邸跡・楚人冠公園・楚人冠記念館・旧我孫子宿名主邸等が続ぎ、江戸から大正時代の面影に満ち溢れています。句会は駅横の我孫子近隣センター八階にて、十三時十分受付開始、投句二句を締め切った後、十三時半長井寛副会長の司会のもと、羽村会長の開会挨拶にて開始されました。

(参加者三十一名)

披 講：野口京子・高橋宗史

清記・点盛：高橋健文・鈴木瑩子

石井紀美子・白木暢子

木之下みゆき

成績発表：高橋健文
写真撮影：石井 稔
木之下副会長の閉会の挨拶で十六時半恙なく終了。

皆様、お疲れさまでした。(藤好 良記)



我孫子駅前にある

「我孫子市ゆかりの文化人」の碑。

大正6年春、武者小路実篤邸にて

(後列左3人目より)

武者小路実篤・柳宗悦・志賀直哉

〔二位〜十位入賞者作品〕

- ① 手賀沼の形は長き鴨の首 宮 たかし
- ② 手賀沼の水重くなる冬の雲 石井紀美子
- ③ 鷗三羽ほどよき距離に白樺派 鈴木 瑩子
- ④ 文豪を直筆に見る冬館 島 隆史
- ⑤ 白樺派の息吹体感して冬日 山口 明
- ⑥ 文人の離れに黄葉の湿り踏む 保坂 末子
- ⑦ 沼枯れてもう君達はいないのか 吉田 耕史
- ⑧ 冬あたたか内ポケットに武者小路 石井 稔
- ⑨ 百年の秋去り志賀の苦惱消ゆ 高橋 宗史
- ⑩ 着流しの直哉偲ばん冬座敷 川島 里子

〔参加者の作品〕

- 歩を延ばす知らぬ小路の花八つ手 浅野 浩利
- 手賀沼を囲む冬日と白樺派 野口 京子
- 終わらない河童のうたげ冬に入る 木之下みゆき
- 大正のよすがを辿る冬はじめ 星野 一恵
- ハケ噛むや巨根は冬を幾星霜 栗原 正子
- 幼子の沼に水鳥喃語明け 飯島 豊
- 冬湖面いたづらものはねちゃって 山崎 公子
- 頂上や紅葉残せし楚人冠 鹿兒嶋俊之
- 枯葦へ迷い込ませて鳥消える 高野 義康
- 白樺派別荘に舞う銀杏落葉 寺田 寺彦
- 悠々と鷹連んでら手賀の丘 藤好 良



白樺文学館

2000年12月佐野力氏の個人メセナとして開館。ロダン作「鼻のつづれた男」の彫刻や創刊からの『白樺』復刻版、文人たちの直筆など見逃せない。



手賀沼と貸しボート場

手賀沼は四季折々の自然が素晴らしく、鳥の博物館、山科鳥類研究所など魅力満載。

オオバンの鼻すじ白く冬陽さし
山茶花の燃ゆる白さよ本陣跡
フリーズに天神坂の落葉踏む
実篤も直哉もいるぞ銀杏黄葉
散る紅葉豊かに集め主の事績

徳田 悠子
横須賀弘子
小川トシ子
羽村美和子
島 洋子



句会風景

御宿から参加の徳田さん、吟行初参加の浅野さん、荒井さん、お疲れさまでした。



志賀直哉邸跡と銀杏黄葉

志賀直哉は大正4年から12年まで滞在の間に、「城の崎にて」「小僧の神様」「暗夜行路」などの名作を世に送り出した。

水鳥の声からみあう手賀すがし
手賀沼の「和解」の兆し石路の花
白樺派の論戦の未帰り花
まづ言葉ありき水面の冬もみぢ
擧散るリーチ先生の手の泥の乾く間に

安田 政子
長井 寛
荒井 寿里
高橋 健文
白木 暢子

《会員・会友の近況》①

- ・訳のわからないものは使わない。LINE、X、AI等。近頃の流行りモノは理解できない。と思つていても、すっかり流行遅れになったころハマる諸々のカルチャー。充実した中年時代を漂つている。(遠藤 寛子)
- ・テレビがつまらない。毎日日本を読んでいる。気力の衰えで俳句もつけない。(小林 実)
- ・十一月から自習監督要員として、高校生の相手をしていきますが、その若さのエネルギーに圧倒されます。若い方がいいですね。(東 國人)
- ・我孫子の吟行会は楽しかったです。楚人冠記念館の紅葉・黄葉が見事でした。(鹿兒嶋俊之)
- ・レクレーションダンスを月に二回習っている。敬老の日にボランティアで老人ホームで踊った。いつの日か見る方になるのかな。(小川トシ子)
- ・四季が二季になりそうな最近の地球ですが、それでもその折々に顔を出してくれる自然の営みを発見し感謝するこの頃です。俳句を楽しんで来たおかげかと思えます。(岡山 敦子)
- ・正月の昔を懐かしく思い起こしている。今はまちの正月も普段着で過ごす事が出来るが、ただ気分はしっかりお正月だし、孫へのお年玉も準備せざるを得ない。騒がしいBSTVを消して、静かに今年の始まりを旨い燗酒で祝うのだ。(北野 耕氏)
- ・今年の三月で退職します。さて退職後は何をいたしましょう。(尾形ゆきお)

金子 未完

猫の恋心中までは行かぬだろう
見える古い見えぬ古いあり衣更
古古古米本当美味いか穀象虫
侘びという美学貫く枯芒

遠藤 寛子

この春も止まらぬ駅のように過ぐ
向日葵のそわかそわかと撓みけり
降ってきた刺さったのです曼珠沙華
恋バナの突如はじまる衣更え

秋谷 菊野

制服の襟糸抜く花の冷え
我が子育てや一畝の葱坊主
声立てず青大将とすれ違ふ
女教師は月光を鞆に入れる

小野 功

十二月八日有事にもうろつくよ
白髭の横顔寒し志賀直哉
働いて働き抜くぞ大嚏
百歳を目標とするお元日

上野 紫泉

「ボレロ」転調トロンボーンから錦秋
生きて燦陽だまりくれし冬紅葉
星流る赤き丸葉呑む時間
締切りは冬芽の中やアンダンテ

大見 充子

グッバイと違うさよなら夏つばめ
切なさの生きるためには熊だつて
閑かさの今日の月こそ母の顔
平和とは無色無臭よ寒卯

飯島 昭子

故郷に旅人として青鬼灯
無口なる農夫の胸に群とんぼ
神宿る八百年の銀杏散る
風邪の床何か急かるる工事音

興津 恭子

二輛車のワンマンカーよ刈田なか
思い出が飛び散る寒禽は啄む
だるまさんころぶころぶな黄水仙
旅心湧く風船は蒼天へ

小林 実

考えて考えて鳥兜にする
おわら盆唄あやしい女ばかりなり
ボクサーの拳が届く天の川
攝津忌の十三日は遠出する

浦野 五郎

獣臭き手袋を脱ぐカウンター
ガウディの曲線自由冬麗
占ひに論されてゐる冬灯
豊年や災害食を賞味せり

置鮎 勝美

春節は地球の揺れる音がする
風鈴や休み休みの残業中
小春日や祖父のスクワットホール毎
寒風に駆けゆく馬を空に見た

小野富美子

晩年の迷走尻尾の無い蜥蜴
身に合わぬ影休ませる木下閣
醉芙蓉よくある話背で聞きぬ
秋風の織き裏声戦あるな

飯塚 宣子

猫の恋風がすねてる二分音符
石庭の風と分けあう麦の飯
商談は不承知花衣たたむ
春動くチャイムはどこかのんびりと

岡田 春人

春の星ものの生まれる音がする
母の日や何か忘れているやうな
小六月寺に日だまり猫だまり
金婚はまだ通過点冬桜

蛭名 節昌

退化する途上にありて帰り花
二股の道に思案の帰り花
帰り花幼馴染が曾孫抱き
帰り花将来性に気構え無し

東 國人

白き目の煮干をつまむ鑑真忌
ドローンの運ぶ爆弾熊ん蜂
青葉風和尚の弾きしジャズピアノ
花八手手と手と手と手と手と手

池田 幸

立ち話し胸の栓抜く葦草
繕いの色柄選りてねじり花
体験を語らぬ墓碑や敗戦忌
見つけっこスマホに鍵に冬帽子

鹿兒嶋俊之

城跡に鳥語欣欣梅の花
青畳蠅虎のふわり跳ぬ
天晴れやもみじ残せし楚人冠
北斎の背中のような炬燵かな

小川トシ子

初夢に少女のひらく玉手箱
ゆつくりと昭和に戻る二日かな
迷いながらも春光の真正面
花鳥風月のなか鯛焼ひとつ

尾形ゆきお

浴槽は出船のかたち神無月
師父が住むあの木犀の匂う家
冬落暉A Iで知るニライカナイ
どうしようもない孤独とふたり絵双六

岩佐 久

ひらめいてどんでん返し青葉閣
麵麩をかごいっばいに憲法記念の日
枯尾花赤あかと染む地平線
十一月しずかにすす二人かな

國分 三徳

生涯の悪友を得て卒業す
席譲り一期一会の夏涼し
淋しいとつぶやいている隙間風
煤払い地球はとても手がかかる

岡山 敦子

一月の生まれ八十路を踏み出せり
花筏桜田門抜け大海に
赤とんぼ川下遙かスカイツリー
校庭のメタセコイアに片時雨

川上 典子

薄氷や蒼天にある猜疑心
誰を頼ろう支柱なきクレマチス
天の川光る悲しみさんざめく
哲学者めく真夜中のシクラメン

加藤 春草

鳥曇傘を持たうか持つまいか
旅客機の行き交ふライト梅雨明け
ひと握りの零余子もらひて炊きあげる
餅つきのつき手こね手の息合はず

近藤 幸子

着ぶくれを一枚剥ぎて人と会ふ
天地のいぶきの中に落葉踏む
あいづちのあるひとときの暖かし
振り返る今年の尻尾にぶらさがり

岡田美美子

幼子のことばを拾う軒つばめ
空蟬や踏ん張っている昭和の木
パソコンもスマホも苦手糸編む
冬の蝶紙一枚の証かな

河合 利枝

大太鼓五臓に響く厄払
いつの日も電話の先の生身魂
雨音の聞こえぬ窓辺梅雨入かな
米寿界限足跡踏んで草紅葉

栗山美津子

推し活に老いは不要ぞ山粧ふ
うたた寝の厨の亡姉に除夜の鐘
鏡割り出汗にたつぷり娘の笑顔
補聴器に春のさきがけ蹄音

久野眞喜恵

本流に集まる力涅槃西風
眼裏に渴いた明日蘆の角
望郷の路地は肩幅夏の蝶
八月の地球儀からのひと雫

北野 耕兵

古本やページに残る冬の色
産土や酒に華やぐ年の暮れ
冬風や棧橋きしむ音ひとつ
巷間や心ひとつに日脚伸ぶ

小野 裕文

縦皺を横皺にして福笑い
救急車しきりに行き来開戦日
竹林に座る石あり冬ぬくし
ロボットが接客をするクリスマス

浅野 浩利

りんご剥く帰郷の線路のように剥く
立冬の風のぶつかる交差点
山に雪列車の切符予約する
藁塚や高圧線をと遠に見て

片岡 秀樹

壺から出壺へと帰る去年今年
寒卵白紙委任に近き目に
車窓打つ霰統計上は愛
雪達磨解体先ずは手を奪う

石井紀美子

釣瓶落し海の広さで夜が来る
仕舞風呂十個の袖子に魔女の爪
ちちの手は薪の温みや山眠る
あつけなく転がるひと日師走尽

石井ひさ子

冬立ちぬ名も無き家事を三つほど
今頃は数学かしら大根買う
飛行機の腹は朝焼け寒の入
寒鴉のど飴一つあげようか

私の感銘句

金子 未完

作者名 号頁

寺町のゆとりの中を赤とんぼ

澤田 壽一 157 9

恐竜の卵が座る春の宵

島 隆史 157 9

鬱の字を解体したる残暑かな

徳吉洋二郎 157 9

家紋より抜けて満開桐の花

中村 冬美 158 2

混沌のリアルとフエイク花ふぶく

星野 一恵 158 3

草むしるころのきれいに空っぽ

山中 葛子 159 13

過疎化する村につばめの帰還兵

木之下みゆき 159 13

草むしるころのきれいに空っぽ

山中 葛子 159 13

雑草の生い茂る夏。いざゆかんと雑草に立ち向かう。心は空っぽになり獅子奮迅で雑草と格闘する。心のきれいにからっぽが見事な表現だ。恐れ入りました。

遠藤 寛子

待ち人は来なくて水を打っている

東 國人 156 2

悪友に手袋を投げそれつきり

小野 功 156 2

凧がつま先立てて駆けてゆく

鈴木卯ノ花 157 8

鬱の字を解体したる残暑かな

徳吉洋二郎 157 9

花菖蒲風吹くたびに青いジャズ

羽村美和子 158 2

春衣体で風を受けるため

三宅たくみ 158 2

初めから壊れていたの野分雲

秋尾 敏 159 12

花菖蒲風吹くたびに青いジャズ

羽村美和子 159 12

花菖蒲は花が大きくトップヘビー。風が吹けば暫く耐え、そのあとグリーンと揺れる。風に揺られて揺れるそのリズムは、まるで裏拍。ジャズだ。心地よい風。青い花菖蒲が青いジャズを奏でる。Swingi Swingi

遠藤 寛子

家中に子供の匂い夏休

徳田 悠子

ロボットが春運びくる喫茶店

岡田 春人 156 2

新蕎麦を打って男は妥協せり

飯塚 宣子 156 2

ヒヤシンス野蛮な君といて楽しい

鈴木卯ノ花 157 8

芋の露ほどの曖昧ふところに

野口 京子 158 2

スイトピーさあこれから面白い

吉田 耕史 159 13

サクソフォン反るだけ反って星飛ばす

倉岡 けい 159 13

ヒヤシンス野蛮な君といて楽しい

鈴木卯ノ花 159 13

人間って勝手なもの。己の気分次第、誰といたって楽しい時は楽しい。ヒヤシンスの花で、他人の心を伐り取るとは。鮮度抜群ノ 秘かに野生の輝きを見る。

秋谷 菊野

平方根開けば春愁の出口

小野富美子 156 2

寒紅を濃くす鏡中から他人

石井紀美子 157 8

葱買ひににんげんのご系聴きたくて

高野 春子 157 9

編みかけの毛糸全部を忘れたたい

野口 京子 158 2

歛立ててチューリップのある立ち話

藤田 富江 158 2

のこぎりを挽く月光はこなごなと

森井美恵子 158 3

空耳の進軍ラッパ桜東風

木之下みゆき 159 13

葱買ひににんげんのご系聴きたくて

高野 春子 159 13

一人暮らしになると、誰とも話さない日がある。スーパーで知人やレジの店員さんと話すと。今日は人と喋ったなと満たされた気持ちになる。この頃は、タツチパネルが多いので、困る。葱に切実さを感じる。巧みな表現に脱帽。

富田 茂

鬼灯を口に幼なの日を胸に

興津 恭子 156 2

流木の白き骨もて初焚火

石井紀美子 157 8

白話草QRコードに紛れ込む

羽村美和子 158 2

取り分けし箸の残り香桜餅

三浦 侃 158 2

野馬追いを話す訛りの父よ好き

中西布美子 158 3

八月の海静寂のモノトーン

荒木 洋子 159 12

明日からを今日からとして水を打つ

羽矢 真人 159 12

中山 皓雷

小ぬか雨沐浴してゐる芽吹きかな

近藤 幸子 157 9

天空に裏道はなし白鳥来

高木 一恵 157 9

蘆火燃え上る平時とはいつのこと

並木 邑人 158 2

天も地もこんがらがって熱帯夜

長井 寛 158 2

葭切の逆さ止まりに鳴きあたる

安井 三緒 159 12

初めから壊れていたの野分雲

秋尾 敏 159 12

空耳の進軍ラッパ桜東風

木之下みゆき 159 13

馬場 馬子

ロボットが春運びくる喫茶店

岡田 春人 156 2

空缶を蹴り大寒の音動く

窪田 俊作 156 3

人日や明日の視える窓磨く

徳吉洋二郎 157 9

天空に裏道はなし白鳥来

高木 一恵 157 9

百年は降りないつもりハンモック

浪岡 玄 158 2

吊革を持つ腕残る広島忌

土肥 勲 159 12

過疎化する村につばめの帰還兵

木之下みゆき 159 13

置鮎 勝美

梅ふふ昨日より今日陽の優し

岡山 敦子 156 3

天空に裏道はなし白鳥来

高木 一恵 157 9

むささびを見た夜は青い眠り葉

羽村美和子 158 2

天も地もこんがらがって熱帯夜

長井 寛 158 2

空の蓋あつつけらかんと取れて夏

森須 蘭 158 3

片足は浄土片足は蟬の穴 長濱 聰子 158 3
 地を蹴つて大根の白せり上がる 橋口 久子 159 13
 空の蓋あつげらかと取れて夏 森須 蘭 159 13
 梅雨明けとはこんな情景ではなからうか。あつさり
 と晴れ間になる。「空の蓋」なら心の蓋をも取つてみたく
 になりました。

置帖 隆一

持ち時間うつかり忘れ秋の蠅 石井 稔 156 2
 伸びた髪一括り過去は忘れる 白木 暢子 157 8
 老々散歩蟻の逆立ちなども見つ 高木 一恵 157 9
 天病むと詠みし世つづく不知火忌 並木 邑人 158 2
 鱗雲蔓は虚空に行き止まる 秋尾 敏 159 12
 退院の妻は客人花芙蓉 土肥 勲 159 12
 八月を午後の紅茶に入れて飲む 大地 節子 159 13
 八月を午後の紅茶に入れて飲む 大地 節子 159 13
 子規の「六月を綺麗な風の吹くことよ」を思い出
 せず出だして始まり、暑い時は熱い飲物が心
 身に効果的と言いますが、この暑い八月を熱い
 紅茶に入れて飲むときつとさわやかな気分にな
 るだろうなと思います。

鈴木 瑩子

熟睡してトマトの赤が好きになる 石井 稔 156 2
 東京は軍港に似て十二月 黒澤 雅代 156 2
 聞き役は懐深き冬木立 川上 典子 156 3
 さくらさくら見え隠れする不発弾 鈴木まんぼう 157 8
 蘆火燃え上る平時とはいつのこと 並木 邑人 158 2
 一茶の生き方時雨の歩き方 藤好 良 158 2
 混沌のリアルとフエイク花ぶぶく 星野 一恵 158 3
 聞き役は懐深き冬木立 川上 典子 158 3

姓に「木」の字が入っている訳ではありませ
 んが、落葉した姿の木にひかれます。一切を放
 下して、寡黙で内にエネルギーを秘めて触れ
 てみればそのパルスが聞こえそう、いつも見て
 いて見られています。

飯塚 宣子

寒に入る人にスマホという孤島 尾形ゆきお 156 3
 病む妻へはやる雪解の雫音 椎名 鳳人 157 9
 八月の思い届かずワルキューレ 寺田 勝子 157 9
 芋の露ほどの曖昧ふところに 野口 京子 158 2
 背中から老いて雉を仕舞ひけり 中山 皓雪 158 3
 鱗雲蔓は虚空に行き止まる 秋尾 敏 159 12
 冬の靴音完結できないメロデー 山田たかし 159 12

岡田 春人

憲法記念日産声を待つ廊下 小川トシ子 156 3
 ふるさとは見知らぬ土地に盆の月 小野 裕文 156 3
 人間を逃げずに草をただ筆る 椎名 鳳人 157 9
 春のカフェ主婦の持ち寄る笑顔かな 近藤 幸子 157 9
 天も地も病む大寒の土踏まず 長濱 聰子 158 3
 空の蓋あつげらかと取れて夏 森須 蘭 158 3
 さくらさくら兵士ひとり母一人 渡辺 澄 159 12
 ふるさとは見知らぬ土地に盆の月 小野 裕文 159 12

長男の私がふるさとを捨て、三男の弟が家を
 継いでいる。年に一〜二度墓参りなどで弟のい
 る実家に帰るが、目にする風景はがらりと変つ
 てしまった。ほとんどの家が建てかえられ、ま
 さに見知らぬ土地となつていてる。

富澤さち子

寒に入る人にスマホという孤島 尾形ゆきお 156 3

初春やコンビニレジの君巢立ち 栗山美津子 156 3
 ささくれを噛みきつて年改まる 寺田 勝子 157 9
 短詩わが銀河にそよぐしのぶ草 高木 一恵 157 9
 法律の隅っこにある沈丁花 松澤 伸佳 158 2
 やまもものおとぎの国へ数珠つなぎ 藤田 富江 158 2
 一面の麦秋へひざまずく風 木之下みゆき 159 13

福田志津子

液状化してゆく記憶熱帯夜 小野富美子 156 2
 春昼のころのかたち楕円形 黒澤 雅代 156 2
 人間を逃げずに草をただ筆る 椎名 鳳人 157 9
 立読みは昭和の遺産文化の日 重田 忠雄 157 9
 草筆るうまくいく日もいかぬ日も 保坂 末子 158 3
 スイトピーさあこれからが面白い 吉田 耕史 159 13
 おはようの一音高く水温む 橋口 久子 159 13

山崎 公子

隣室は速いステップ十三夜 秋尾 敏 159 12
 青田風むかし電車に手をふつて 渡辺 澄 159 12
 秋草の微笑みパン屋開店す 和田 三枝 159 13
 振り向けば母はまだ立つ夕月夜 大地 節子 159 13
 嘘ついた昨日を隠し夏帽子 本吉万千子 159 13
 いづくより風吹き入りて秋すだれ 山口 彩子 159 13
 一面の麦秋へひざまずく風 木之下みゆき 159 13
 一面の麦秋へひざまずく風 木之下みゆき 159 13
 ひざまずく風である。風と言えば髪をなびか
 せるロマンチックがあれば、何かを断ち切る内
 なる激しさだったり。内に入る感情の表現に風
 は欠かせないのだと思います。麦秋へ春の悦び
 の重層感がふつふつと沸き、風がひざまずく。

津田沼研究句会報告

(於：津田沼一丁目町会会館)

第四〇〇回 (令和八年一月十三日)

司会 徳吉洋二郎

入り船や津守感涙宝船
風を得て彼方の光去年今年
津田沼に重ねし集い福寿草
願わくば津津浦浦に春の風
初霜や小さき祠も輝きて
鎌倉の津なる師思ふ寒の入り
津田沼に四百の調べ初句会
瑞雲が大つごもりの関八州
元旦の鬘ふはり年女
津津と零余子こぼるる他郷かな
青函ゆく津津浦浦の蟹工船
不生不滅津々浦々に除夜の鐘
隙間風ありて二人は通じ合う
津に舫う舟を数えり冬茜

青葉研究句会報告

(於：千葉市民会館)

第一六八回 (令和八年一月二十二日)

司会 栗原 正子

鬼女紅葉都を忍び雪に哭く
今宵戸を叩くは鬼か雪女郎
天狼は三鬼鬼房兜太の目
「句の鬼」の意地の足跡名残雪
二人居の櫓の明かりの中にかな
渾身の邪鬼や寒九の西大寺
春節の上海みかんひとつあり
関帝廟にやうやう着きし黄沙かな
鬼と神と人紙一重初日の出

柏研究句会報告

(於：柏市「ハックルベリー書店」2階)

第一五一回 (令和七年十二月十三日)

司会 岡田 春人

十二月死ぬ気などなくて死に支度
宇宙への挑戦やまず冬薔薇
風花は黙の語り部義士の墓
鳩あつという間に夕ごころ
産土の言語野を行く一茶の忌
銃口に鳩の飛びでる開戦日
ハロウインの仮装の毒に紛れ込む
沁みるひととき漂流の冬の雲
熊が生まれたかと手賀沼のロダン
生つ粋の方向音痴恵方巻き

君津研究句会報告

(於：君津市生涯学習交流センター)

第七十一回 (令和八年二月五日)

司会 越野 雄治

年暮るる噂転がし梯子酒
語尾優し友のひと言梅一輪
寒の夜や丸くまあるく猫を抱く
地球儀の崩れ始める恵方道
文藝の知音の絆小春風
天下布武笛鳴きならば殺さるる
待合室に赤いミトンと文庫本

いすみ・安房研究句会報告

(於：勝浦・藤屋そば店)

第十二回 (令和八年一月二十五日)

司会 高橋 宗司

火事跡に家族写真と傘の骨
日が暮れて魔物棲む色冬の川
バイロンの詩文を読めば木の芽吹き
文じゃだめ文であらわせ恋の春
芽水仙鄙の画廊を守ること
梟が知っているとよ黄泉の道
「文」の一字埋まらぬままの初句会
初春の飛砂顔を打つ九十九里
恋文や引き出し探す春銀河
晩年の生き甲斐にして日向ぼこ
遠景に富士くつきりと寒早
荒神は経文嫌い薺打つ

強化部だより

千葉県現代俳句協会青年部活動報告

夏雲ネット句会隔月実施。(次回三月) 年二回吟行会実施。(次回五月頃) 参加希望の方はご連絡を。六十歳以上は準会員。
kokomiya2003@yahoo.co.jp (三宅まで)

柴又帝釈天とその界限吟行会

(十二月十四日実施)。一人一句抜粋

冬の柴又路地よりすつと寅さんが
天井面の龍のぞき出る冬の雨 東 國人
柴又の神も賑わう冬の道 羽村美和子
冬の庭座禅で見入る異国人 佐藤 鮎美
葉が落ちて巨大な緑が緩んで裸になり 今泉 トミ
葉が再び自由になる バレンチノ
寅の像昭和はここに留まりぬ 白木 暢子
雪吊の力を秘めて孤高かな 中村喜美子
冬紅葉ガラスの粒の如く雨 三宅たくみ
極月のざらつき均す草だんご 松本 千花
宮彫りの兎の背中十二月 遠藤 寛子

冷たい雨の一日。

街中は空いており、のんびりと柴又を散策しました。バレンチノさんは日本を観光で訪れたフランスのミュージシャンの青年。俳句に興味を持ち、飛び入りで参加してくれました。彼の人生初挑戦の俳句もご覧ください。国際交流の場にもなった吟行会でした。



寅さんを囲んで柴又駅前にて
左から三人目 バレンチノさん

第十二回あしたば句会(一月開催)

一人一句抜粋兼題「鶯」「半分」

着ぶくれて卵産めさうな気がする 石井 稔
あんばんの半分空気が春近し 鈴木卯ノ花
初鶯このまま鳴かぬのも自由 白木 暢子
あなたにはリースドライの七草粥 東 國人
セーターの女がひとり山岡家 小藤真由美
本厄終へネスカフェ・エクレア鶯餅 無 子
俳人は鶯の句から産まれけり 佐藤 鮎美
初鶯三度に一度うまくいく 遠藤 寛子
めでたさは半分ぐらい年明け 三宅たくみ
飄々とアレクサの棲む冬館 松本 千花
鶯のケキヨのあたりが恋日和 羽村美和子
うぐいすや二十二歳の愛猫と 森井美恵子
山茶花散る臉の裏で笑う人 陸野 良美
橙を飾られ信楽たぬき立つ 青野 友香
鶯の方言聞くや好きじゃけん 萩野由美子

初心者講座 第3期 第八回〜十回
歌留多会たちつてととと猫通る 鈴木卯ノ花
漆黒の馬のいななき初御空 佐藤 憲一
信じるの真つ赤な嘘を凍らせて 萩野由美子
孤独から抜ける穴あり雪解道 宮原 青佳
落葉踏む和服の女性から尻尾 横須賀弘子

第八回目は赤と黒を入れた句。第九回目は歌留多、第十回目は雪が課題でした。都合良く雪が積もりましたが、温暖な地域と北国では雪の受け止め方が違います。季語の本意について学ぶ良い機会となりました。一方、俳句の歴史の中で、季語は時代と共に変化してきました。大切に扱うことは当

然ですが、季語が全てではありません。季語は他の言葉との関わりにおいて、俳句形式によって生かされるのです。
四月からは初心者講座の第四期が始まります。新たな自分発見！是非一緒に楽しみましょう！
(羽村美和子記)

初心者講座 第四期生 募集

日時 令和8年4月11日(土)13時より
原則第3土曜日 年10回
場所 千葉市民会館
連絡先 羽村美和子 043-256-6584
e-mail rosetea.niwako@yahoo.co.jp

《会員・会友の近況》②

- ・行くことができなかった池田澄子さんの講演をテープ起こして下さったこと、大変有難く感謝しております。(河合 利枝)
- ・いすみ安房研究句会に入会させて頂いた。隔月句会なのでまだ三回の参加であるが、楽しく学ばせて頂いている。(石井紀美子)
- ・このほど、加藤法子様の遺句集「鬼の子」が上梓された。昭和十四年、長野県生まれ、平成八年「きみさらす」入会、同九年同人、令和七年三月ご逝去。「かとうのりこ」、あの堂々独特な名乗りが懐かしい。
- ・土筆摘む胎児の許すだけ屈み
子の部屋に子の居る不安西日差す
八月の拳いくつあつても足らぬ
鬼の子と名告る泣きそうな声で
ご冥福をお祈りいたします。(木之下みゆき)

ひろば

百瀬一兔さん「火の聲」五十句

第四十二回兜太現代俳句新人賞受賞

令和七年十一月三日(月・祝) 東京上野の「東天紅」にて、令和七年度第六十二回現代俳句全国大会の席上で表彰されました。百瀬一兔さんは平成九年生れ、千葉市在住。

●入賞句抜粋

溽暑鬱々ドクターフィッシュたかる
秋暑し童のほひの情事せり
この猿の腰掛から街が腐る
からつばの牛舎あをあを返り花
さくらさくら祖母を燃やした火はどんな

■令和八年度総会

・席題句会のお知らせ

日時 令和八年三月二十二日(日)
会場 千葉市民会館 三階
受付 十一時半より
定期総会 午前十二時より
席題句会 午後二時より 句会整理費千円
席題二句 発表午前十一時半
投句締切 午後一時十分
※皆様の御参加をお待ち申し上げます。

掲示板

《会員・会友異動》

●逝去 (会員) 水沼 幸子 山崎 聰

●退会 (会員) 森村 文子

(会友) 村田 満枝

●新会員・会友

栗原 正子 (会員) 徳吉洋二郎 紹介

●地区内移転 (会員) 塩野谷 仁

●俳名変更

(会員) 高橋宗史→高橋宗司そうじ

△令和八年度第一回幹事会△

日時 令和八年一月二十日(火)

場所 船橋市勤労市民センター

議題

- 一、令和八年度総会資料について
- 二、令和八年度総会の流れ確認
- 三、四十五周年記念俳句大会総括
- 四、令和八年度俳句大会(11・1)について
- 五、令和七年度秋・八年度春の吟行会について
- 六、会報一六〇号について
- 七、青年部活動について
- 八、初心者講座について
- 八、現代俳句協会(本部)の動向

◆春の吟行会のお知らせ

場所 房総南端の地 館山界限
日時 令和八年四月三十日(木)
集合 館山駅 十時
句会場 菜の花ホール(館山市)
*房総の春を楽しみましょう。
詳細は同封のチラシをご参照ください。

- 九、神奈川俳句大会について
- 十、各研究会状況報告
- 十一、その他

会員・会友動静
次回幹事会五月十九日(火)

□□事務局・編集部だより□□

●幹事会の折、白木副会長より津田沼研究会が本年一月、四百回を迎えた旨、報告があった。誰もが対等の立場で自由に発言出来る句会をと、平成四年六月発足したのが月例研究句会。現在の津田沼研究句会の前身である。当時の会報二十六号を覗くと山中葛子さん、並木邑人さん、岡田淑子さん方の名句が並ぶ。四百回という積み重ねに大きな川のうねりを感じた瞬間であった。

現代俳句千葉 第一六〇号
令和八年三月一日発行

発行人 千葉県現代俳句協会
会長 羽村美和子

現代俳句千葉編集部
〒278-0037 野田市野田

六七七-1A二二五
木之下みゆき

千葉県現代俳句協会事務局
〒299-2521 南房総市白子六七三-1

TEL 〇四七〇-四六-二九一五 東 國人
FAX 〇四七〇-四六-三〇七二